[世界のタイル事典]

tile no.11

日本のタイルの曙——寺院の敷瓦から瀬戸の本業敷瓦まで *Japanese Tile 1*

author

竹多 格 | Itaru Takeda

たけだ・いたる——INAXミュージアム推進グループ/1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。1979年、伊奈製陶(後のINAX、現LIXIL)入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。

[クローズアップ・タイル]

淡路焼多色浮彫敷瓦——1

文政年間に賀集珉平が淡路島で始めた珉平焼を継承して、明治18年に淡陶(だんとう)社が設立され、明治26年に淡陶株式会社となる。下の敷瓦は湿式成形で明治30年代に制作されたもの。伝統的な和柄が多色レリーフで表現されている。この後、明治40年代から淡陶は不二見焼と共に、英国の乾式プレス成形法を国産化し、本格的なタイルの生産を開始した[明治30年代/151×151×16mm/日本]

1

[タイルのデザイン]

タイルの図柄——2–6

瓦素地の無地陶板に始まり、江戸時代の手彫りや印判による唐草模様に釉を掛けたもの、明治時代には当時流行の染付け柄を銅版転写技法で絵付けしたものがつくられた。壁や床の仕上げ材として張り込むために、ヴィクトリアン・タイルにも見られるような連続模様も多用されている

2——透明釉丸彫呉須唐草文敷瓦[江戸時代初期/236×237×30mm]|3——染付草花文本業敷瓦[明治時代/181×185×12mm]|4——染付コウモリ文本業敷瓦[明治時代/150×151×10mm]|5——藍地浮彫花文新製敷瓦[明治時代/152×152×16mm]|6——青磁浮彫草花文新製敷瓦[明治時代/183×184×13mm]|いずれも制作地は日本

[タイルのある風景]

新しいタイル文化——7,8

日本の建築では基本的にタイルを必要としなかったが、中国の建築様式を取り入れた禅宗寺院の床タイルや、明治時代に入ると瀬戸で本業敷瓦が生まれ、内装タイルの需要の端緒を担った

7——定光寺徳川義直公廟焼香殿(愛知県瀬戸市/江戸時代初期):中国明代の帰化人・陳元贅が儒教様式で設計したと伝えられている。元贅はやきものの技術を身につけた人物で、瀬戸の陶業を指導した[出典:本誌No.13,1977.12]|8——旅館・越後屋(長野県角間温泉/明治時代):コウモリ柄の瀬戸の本業敷瓦が洗面台と浴室腰壁に張られている[出典:本誌No.24,1979.10]

— 木や土など素材の持つ温もりや美しさを大切にしてきた従来の日本建築は、構造的にタイル施工の条件に合わなかった。また、現在でもタイルが盛んに使われている中近東のように建物の内外をタイルで装飾する発想もなかった。しかし、中国の建築様式を取り入れた寺院建築の中には、床にタイルを敷き詰めた例が幾つも見られる。特に鎌倉時代以降に建てられた禅宗寺院の本堂には、瓦色や釉薬の掛かったタイルが敷き詰められ、“敷瓦(しきがわら)”と呼ばれた。床タイルの原形と見ることができる。

— その後、江戸時代に耐火・耐湿の目的で、瓦と同じ材料で制作されたタイルを壁に張り、目地を漆喰で盛り上げた“なまこ壁”が土蔵の壁としてつくられた。さらに明治時代に入ると、洋館建設のためにヨーロッパから輸入されたタイルに感化され、瀬戸を始めとする日本各地のやきもの産地で、独自のタイル制作が始まった。瀬戸では、従来の陶器質の材料で手づくりされたタイルを“本業敷瓦”と呼び、現在のタイルと同じように商家や邸宅、旅館などの水まわりに使われた。当時、日本で流行していた白地に青の文様の入った染付技法を取り入れ、当初は手描きで制作された。明治中期以降には、西洋から輸入された銅版転写の技法を導入して絵付けの効率化を図った。また、磁器を焼く窯元でも磁器質のタイルが制作され、各地に出荷された。本業(陶器窯)と新製(磁器窯)という窯元自体の住み分けがある中で、図柄や寸法、絵付け方法などタイルの流行を先取りして製品に取り込むなど、ものづくりにかける瀬戸の人々の気概がうかがえる。

— 内装タイルメーカーのパイオニアである淡陶の創業家でも、珉平焼によるタイルを独自の技術で制作し、やがてプレス成形によるタイルの量産時代を切り開いていく。その他、有田や常滑でも手づくりのタイルがつくられたが、やがて寸法や形状の精度が高い機械生産のタイルに取って代わられる。

— このように日本のタイルは、寺院建築の床タイル、瀬戸を始めとする窯業地の手づくりタイルを経て、西欧生まれの装飾タイルの国産・量産化によって、本格的なインテリアタイルへと進化していく。その後、関東大震災後の復興において、ビル建築は赤レンガ造から鉄筋コンクリート造へ転換が進み、タイルはビル外壁の仕上げ材として新しい時代を迎える。

— 日本で“タイル”という用語は、大正11年に統一用語として業界から発信された。それまでは、敷瓦、化粧瓦、化粧レンガなど、さまざまな呼び名が混在していた。

— ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。

2

3

4

5

6

7,8